

## 漱石「明暗」論

——津田の温泉行きの意味——

山 本 勝 正

### 一

「明暗」は、大正五年五月二十六日から十二月十四日まで、百八十八回にわたって、朝日新聞に連載された。この作品の特質として、従来次のようなことがいわれている。江藤淳氏の「道草」がすでにそうであつたが、「明暗」に描かれてゐるのは一層徹底した日常的現実の世界である。<sup>(1)</sup> という指摘があるように、「明暗」には、それまでの漱石の作品に比して徹底した日常的な現実が描かれてゐるのである。次に、三好行雄氏の「全能的視点による世界の構築に成功したといつてよい。」<sup>(2)</sup> という指摘にある如く、全能的視点のもとに、見事な心理描写が、加藤周一氏をして「明暗」の作者は、明治大正の文学史に、無双の心理小説家<sup>(3)</sup>といわしめた心理描写がなされていることである。

さらに、「はじめて、漱石も女がわかるようになったと思つた。」<sup>(4)</sup> という正宗白鳥や、「女の物語」<sup>(5)</sup> という平岡敏夫氏の指摘の如く、女性描写が、それまでの作品に比して、すぐれていることである。そして、主人公津田の設定である。それまでの作品にみられた、明らかに漱石の分身であることが分かるような、倫理的な厳しさをもたない俗物を主人公にしたことである。

主人公津田の人間像を考えていくことから、論を展開していきたい。まず作者の説明をあげてみる。「見栄の強い」<sup>(6)</sup>、「容易に己れを忘れる事の出来ない性質」<sup>(97)</sup>、「嘘吐き」<sup>(15)</sup>、「利害の論理に抜目のない機敏さを誇りとする」<sup>(34)</sup>、「自己の快楽を人間の主題にして生活しようとする」<sup>(41)</sup>、「伶俐」<sup>(33)</sup>等がある。また他の人物によって、どのように評されている

かを見てみたい。妻のお延は、「手前勝手な男」(四十七)、「厳格な人」(六十一)、「淡泊でない」(百十三)と評し、友人の小林は、「仕合せな男」(百十八)、「損得利害をよく心得てゐる男」(百十九)、「聰明」(百十八) (百五十八) (百六十六)、「淡泊でない」(八十四)、「贅沢三昧我儘三昧に育つた人」(百五十七)、「君の腰は始終ぐらついている」(百五十七)と評し、妹のお秀は、「昔のやうに人の誠を受け入れて下さる事が出来ない人」(百)、「嫂さんと一所になる前の兄さんは、もつと正直でした。少なくとももつと淡泊でした。」(百一)、「強情」(百六)、「淡泊でない」(九十九) (百七)と評し、吉川夫人は、「研究家」(十一)、「丸で自分が見えない」(百四十一)、「色気が多過ぎる」(同)、「図々々しい性質」(同)と評している。以上津田に対する主要登場人物の批判は厳しい。しかし彼はこのような批判に少しも動じない人間である。そこにまた津田の俗物たるゆえんがあるともいえよう。

このような津田は、かつてどのように、研究者から批評されてきたか、その代表的なものをあげてみる。谷崎潤一郎の「閑つぶしの煩悶家」(6)、平野謙の「ツマラン坊」(7)、越智治雄氏の「卑小な意識家」(8)、荒正人氏の「俗物中の俗物」(9)、大岡昇平氏の「二流のエゴイスト」(10)、佐藤泰正氏の「才子

風の凡庸なる人物」(11)などがある。これらの津田像はいずれも否定的であるが、そのような津田でも、その存在の価値を評価していかうとする意見もある。越智治雄氏の「津田は漱石のニヒリズムを分け与えられている。」(12)や、平岡敏夫氏の、津田は「過去」に自覚的たらざるをえぬ人間」であるとする意見である。このような、ある意味では漱石に近い津田は、後に述べるが、温泉行き以後明らかになってくるのである。

作品「明暗」は、主人公津田と、妻のお延の夫婦関係が中心である。二人の關係は、「毎日土俵の上で顔を合せて相撲を取つてゐるやうな夫婦關係」(四十七)である。また二人の關係について、次の様な説明もある。

愛の戦争といふ眼で眺めた彼等の夫婦生活に於て、何時でも敗者の位置に立つた彼には、彼でまた相當の慢心があつた。所がお延のために征服される彼は已を得ず征服されるので、心から帰服するのではなかつた。堂々と愛の橋になるのではなくつて、常に騙し打に会つてゐるのであつた。お延が夫の慢心を挫く所に氣が付かないで、たゞ彼を征服する点に於てのみ愛の満足を感じる通りに、負けるのが嫌な津田も、残念だとは思ひながら、力及ばず組み敷かれるたびに降参するの

であつた。(百五十)

このように、ある意味では絶望的な夫婦関係であつても、入院見舞いにきたお秀と津田夫婦の事件のあとに次の様な場面がある。

努力もなく意志も働かせずに、彼は自然の力で其所へ押し流されて来た。用心深い彼をそつと持ち上げて、事件がお延のために彼を其所迄運んで来て呉れたと同じ事であつた。お延にはそれが嬉しかつた。改めやうとする決心なしに、改まつた夫の態度には自然があつた。(中略) 所がお秀との悶着が、偶然にもお延の胸にある此扉を一度にがらりと敲き破つた。しかもお延自身毫も其所に気が付かなかつた。彼女は自分を夫の前に開放しようといふ努力も決心もなしに、天然自然自分を開放してしまつた。(百十三)

しかしこの様な二人の關係も一時的なものでしかない。結局津田は、お延との生活を次のように考へている。

お延と仲善く暮す事は夫人(吉川夫人)に對する義務の一端だと思ひ込んだ。喧嘩さへしなければ、自分の未来に間違はあるまいといふ鑑定さへ下した。(百三十四)

そして、彼は「世間」の取沙汰通り、お延を大事にす

るのではなかつた。(百三十三) し、「お延を愛してもゐたし、又そんなに愛してもゐなかつた」(百三十五) のである。

そのような曖昧な、ある意味では絶望的な状況にいる津田に、吉川夫人は、清子に會つて「男らしく未練の片を付けて来る」(百四十) ために、彼女のいる温泉場へ行くことをすすめる。津田の温泉行きは、彼にとって日常的現実の克服、お延との夫婦關係の現実の克服を意味していたのである。

## 二

津田は温泉行きを體驗することによって、非日常の世界に直面することになるのである。もちろん、温泉行き以前の津田に全く非日常の世界がみえなかつたわけではない。たとえば、小説の冒頭に近い場面で、彼は次のような事を體驗している。

暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押し遣つたり、前に進むべき彼を後ろに引き戻したりするやうに思へた。(二)

また、温泉行きの直前の小林の送別会で、彼からみせられた手紙を読んで津田は次のように思う。

彼は何処かでおやと思つた。今迄前の方ばかり眺めて、此所に世の中があるのだと極めて掛つた彼は、急に後を振り返らせられた。さうして自分と反対な存在を注視すべく立ち留まつた。するとあゝあゝ是も人間だといふ心持が、今日迄まだ会つた事もない幽霊のやうなものを見詰めてゐるうちに起つた。極めて縁の遠いものは却つて縁の近いものだつたといふ事実が彼の眼前に現はれた。彼は其所で留まつた。さうして徘徊した。けれどもそれより先へは一步も進まなかつた。彼相應の意味で、此気味の悪い手紙を了解したといふ迄であつた。(百六十五)

津田は、ここで、自分の思つていた日常世界以外にも、世界があることを知る。三好行雄氏の「日常の地平に、みずからの視野をたのんで安堵する津田への警告であることは間違いない。」<sup>(14)</sup>という指摘の通りであらう。

津田は温泉場へ着いてから、よりはっきりとした非日常の世界に直面することになる。

霧とも夜の色とも片付かないものゝ中にぼんやり描き出された町の様は丸で寂寞たる夢であつた。(中略)

「おれは今この夢見たやうなものゝ続きを辿らうとしてゐる。(中略) 実は突然清子に背中を向けられた

其刹那から、自分はもう既にこの夢のやうなものに崇られてゐるのだ。さうして今丁度その夢を追懸けやうとしてゐる途中なのだ。顧みると過去から持ち越した此一条の夢が、是から目的地へ着くと同時に、からりと覚めるのかしら。(中略)

今迄も夢、今も夢、是から先も夢、その夢を抱いてまた東京へ歸つて行く。それが事件の結末にならないとも限らない。」(百七十一)

ここにみられる、人生を夢とみる考え方は、既に指摘もある如く「振り返ると過去が丸で夢のやうに見える。」「一生は終に夢よりも不確実なものになつてしまはなければならぬ」とある「点頭録」(大5・1)に通じるものであり、單に主人公津田の考えにとどまらず、確かに漱石自身の人生観にも通つてゐるものであつた。そして、前にみた「暗い不可思議な力」と明らかに照応してゐる<sup>(15)</sup>のである。ともかく、ここで津田は今迄確たる日常と思つていた現実が、変化してみえてきたことを知るのである。

次に彼は自然に直面する。それまでの自然は、たとえば彼は広い通りへ来て其所から電車へ乗つた。堀端を沿ふて走る其電車の窓硝子の外には、黒い水と黒い土手と、それから其土手の上に蟻まる黒い松の木が見え

る丈であつた。

車内の片隅に席を取つた彼は、窓を透して此さむざむしい秋の夜の景色に一寸眼を注いだ後、すぐ又外の事を考へなければならなかつた。(十三)

であり、たとえば、

津田は返事をする前に、まづ小林の様子を窺つた。

彼等の右手には高い土手があつて、其土手の上には蕨こん鬱した竹藪が一面に生ひ被さつてゐた。風がないので竹は鳴らなかつたけれども、眠つたやうに見える其笹の葉の梢は、季節相應な蕭索の感じを津田に与へるに充分であつた。

「此所は厭に陰気な所だね。何処かの大名華族の裏に当るんで、何時迄も斯うして放つてあるんだらう。早く切り開いちまへば可いのに」

津田は斯ういつて当面の挨拶を胡麻化さうとした。

(三十三)

であつた。前者は「一寸眼を注いだ後、すぐ又外の事を考へなければならなかつた」に、後者は「早く切り開いちまへば可いのに」という言葉に、自然と津田との距離は明白である。これらの自然は、津田という存在に関わってくる自然でない。ところが温泉場でみた自然は明らかに違ふの

である。

一方には空を凌ぐほどの高い樹が聳えてゐた。星月夜の光に映る物凄い影から判断すると古松らしい其木と、突然一方に聞こえ出した奔湍の音とが、久しく都会の中を出なかつた津田の心に不時の一転化を与へた。彼は忘れた記憶を思ひ出したときのやうな気分になつた。

「あゝ世の中には、斯んなものが存在してゐたのだつけ、何うして今迄それを忘れてゐたのだろう」

(中略)

「松の色と水の音、それは今全く忘れてゐた山と溪の存在を憶ひ出させた。全く忘れてゐない彼女、想像の眼先にちら／＼する彼女、わざ／＼東京から後を跟けて来た彼女、は何んな影響を彼の上に起すのだろう」

冷たい山間の空気と、其山を神秘的に黒くぼかす夜の色と、其夜の色の中に自分の存在を呑み盡された津田とが一度に重なり合つた時、彼は思はず恐れた。ぞつとした。(百七十二)

ここではもう津田と自然の間に距離はない。津田は大きな自然にふれ恐怖さえ感じている。このような自然によって、津田の日常的現実の意味が問い直されようとしている

といえよう。それは、また津田の考えた日常世界と違う世界との関わりを知るといふ点で、前述の小林のみせた手紙の中の世界とも通い合うものであらう。

次に「眼鼻立の整つた好男子」(百七十五)である津田は、自分を瘦馬と思うのである。その場面は次の如くである。

濫りなる鞭を鳴らして、しきりに瘦馬の尻を打つた。

失はれた女の影を追ふ彼の心、其心を無遠慮に翻訳すれば、取りも直さず、此瘦馬ではないか。では、彼の眼前に鼻から息を吹いてゐる憐れな動物が、彼自身で、

(百七十二)

ここで、津田は、自分を「憐れな動物」「瘦馬」とみているが、そのことは、彼が、自分がいかにみじめな存在であるかを、はじめて意識したことを意味している。「好男子」から「瘦馬」のイメージの落差は大きい。そしてそれは津田の自己喪失にもつながっていくのであらう。

さらに津田は、宿の洗面所の鏡をみて次のように思う。

何時もと違つた不満足な印象が鏡の中に現はれた時に、彼は少し驚ろいた。是が自分だと認定する前に、是は自分の幽霊だといふ気が先づ彼の心を襲つた。(百七十五)

津田が、自分をみて自分の「幽霊」<sup>(16)</sup>と思うことは、先の、自分を「瘦馬」に思うことの延長として考えられることである。ともかく、津田に自分の存在がみじめなものであることがみえてきたことに間違いはない。

以上の四点からみて、津田は日常的現実の中に確たる自己を持ち、確たる位置をしめていたと思つていたが、非日常の世界に直面し、現実世界の変化を体験し、自身の変化を体験するのである。そのことによって、彼は自己喪失の危機にさらされることになるのである。そのような津田であつてみれば、自己を「夢中歩行者」<sup>（ギムカンピュリット）</sup>（百七十七）、「夢遊病者」(百八十二)と思うのも無理からぬことである。ある意味では、津田に自己の本当の姿が次第に見えはじめたといえるかもしれない。

### 三

津田は、温泉場へいって、非日常の世界に直面した後、清子に再会する。清子は津田によれば、「優悠」<sup>（おつとり）</sup>「緩漫」<sup>（のろま）</sup>「緩い人」(百八十三)、「逼らない人」(百八十四)、「單純」<sup>（たんたん）</sup>「鷹揚」(百八十五)である。未完であることもあつて、清子の登場場面が少ないので、彼女の人間像は分かりにくいのである。だがお延と対照的に設定されていることに間

違いはない。お延は作者によって、「敏感」(四十七)(六十二)、「鋭敏」(五十九)、「明敏」(百五十)、「意地の強い」(六十二)、「利かない気性」(七十二)、「虚栄心の強い」(百二十六)、「技巧を有つてゐる」(百二十四)とされている。

そしてお延と清子が対照的に設定されていることは、一つはお延の縋袍と宿の縋袍という形で、もう一つは二人の眼の描写という形で明確にあらわされている。

其時袖畳みにして下女が衣桁へ掛けて行つた縋袍が眼に入つた。気が付いて見ると、お延の袍へ入れて呉れたのは其儘にして、先刻宿で出したのを着たなり、自分は床へ入つてゐた。彼は病院を出る時、新調の縋袍に対してお延に使つたお世辞を忽ち思ひ出した。同時ににお延の返事も記憶の舞台に呼び起された。

「何方が好いか比べて御覧なさい」

縋袍は果して宿の方が上等であつた。銘仙と糸織の区別は彼の眼にも一目瞭然であつた。縋袍を見較べると共に、細君を前に置いて、内々心の中で考へた當時の事が再び意識の域上に現はれた。

「お延と清子」

独り斯う云つた彼は忽ち吸殻を灰吹の中へ打ち込ん

で、其底から出るじいといふ音を聴いたなり、すぐ夜具を頭から被つた。(百七十七)

「新調の縋袍」がお延を、「宿の縋袍」が清子を意味していることは明白である。津田が宿の縋袍を着ていたこと、また宿の方が上等であると思うことは、津田の気持ちがいかに清子に魅かれてゐるかをあらわしているといえよう。

次に二人の眼の描写についてであるが、まずお延について見てみたい。

彼女の眼は細過ぎた。御負に愛嬌のない一重瞼であつた。けれども其一重瞼の中に輝やく瞳子ひとみは漆黒であつた。だから非常に能く働いた。或時は専横と云つてもいい位に表情を恣しまゝにした。津田は我知らず此小さい眼から出る光に牽き付けられる事があつた。さうして又突然何の原因もなしに其光から跳ね返される事もないではなかつた。

彼が不図眼を上げて細君を見た時、彼は利那的に彼女の眼に宿る一種の怪しい力を感じた。それは今迄彼女の口にしつゝあつた甘い言葉とは全く釣り合はない妙な輝きであつた。(四)

次に清子について見る。

其顔を睨<sup>じ</sup>と見守つた清子の眼に、判然した答を津田から待ち受けるやうな予期の光が射した。彼は其光に対する特殊な記憶を呼び起した。

「あゝ此眼だつけ」

二人の間に何度も繰り返された過去の光景<sup>シーン</sup>が、あり／＼と津田の前に浮き上つた。其時分の清子は津田と名のつく一人の男を信じてゐた。だから凡ての知識を彼から仰いだ。あらゆる疑問の解決を彼に求めた。自分に解らない未来を挙げて、彼の上に投げ掛けるやうに見えた。従つて彼女の眼は動いても静であつた。何か訊かうとするうちに、信と平和の輝きがあつた。彼は其輝きを一人で専有する特権を有つて生れて来たやうな気がした。自分があればこそ此眼も存在するのだとさへ思つた。

二人は遂に離れた。さうして又会つた。自分を離れた以後の清子に、昔の儘の眼が、昔と違つた意味で、矢つぱり存在してゐるのだと注意されたやうな心持のした時、津田は一種の感慨に打たれた。(百八十八)

この二人の眼の描写によって、すなわち「一種の怪しい力」の眼のお延と、「信と平和の輝き」の眼の清子、津田にとつての二人の意味は明確である。以上みてきた如く、

縋袍や眼の描写によつても、津田の温泉行きが、吉川夫人のいうやうな「男らしく未練の片を付けて来る」だけのものでなく、どこまで彼に意識されているかは問題があるにしても、彼にとつて、清子との愛の復活の願いを意味していたことは明らかである。

清子について、たとえば、小宮豊隆氏は「漱石の理想の女性」<sup>(17)</sup>、荒正人氏は「永遠の理想的女性」<sup>(18)</sup>、唐木順三氏は「私といふ我意をもたない清子」<sup>(19)</sup>、岩上順一氏は「本性の自然そのままだにいきる女性」<sup>(20)</sup>、V・H・ヴェリエルモ氏は「アガベの具現そのもの」<sup>(21)</sup>というように、理想的女性としてとらえる見方が多勢をしめているが、江藤淳氏や、内田道雄氏や、相原和邦氏等によつて清子を理想的女性としてみる見方に反論がでていることも事実である。江藤淳氏は、気性の強い細君にへきえきした男が、昔の恋人を理想化するのあたり前で、そこに格別の意味があるわけではない。むしろ清子は、お延やお秀と必<sup>マツ</sup>適し得るやうな猛烈な個性の所有者であつて、彼女達と同じ「詩」のない日常生活の住人にすぎぬとする方が、より自然でもあり、現実的でもある<sup>(22)</sup>。

と述べられ、内田道雄氏は、「津田をやりこめる清子の口調からは、すでにお延に共通するものが覗かれる」とされ、



「清子を、ここではお延との対比において理想化しようとするよりは、お延と同様現実にもみれた次元で、漱石はとらえようとしている」<sup>(23)</sup>と述べられ、相原和邦氏は、「関との関係において、汚辱に満ちた現実に立ち続けている彼女は、まさに虚無の上に座している」<sup>(24)</sup>と述べられている。

確かに清子は、重松泰雄氏が「作者が清子一人に対してだけ、他の人物並みに相対化の手続きをいっさい見せていない」<sup>(25)</sup>と述べられ、三好行雄氏が「清子は他の人物によって相対化されていない」<sup>(26)</sup>と述べられている如く、作品の現存する範囲においては、他の人物による批判がないこともあって、彼女を理想的女性としてとらえる見方も一概に否定できないが、やはり、清子は、津田にとって理想の女性であったとしても、本質的な意味での理想の女性とは、いいがたいのである。私は全面的に賛成できないにしても、江藤淳氏、内田道雄氏、相原和邦氏の意見の側に立つて清子像を考えていることを、ここでことわっておきたい。

#### 四

津田と清子の関係は、結局どうなるのか、推定することはむずかしい。しかし、現存の範囲内で考えれば、それなりの予測がつかないわけではない。漱石がこの作品におい

て、肉体と精神の関係をつながりあるものとして考えていることは明白である。津田は、小説の冒頭に近いところで「此肉体はいつ何時どんな変に会はないとも限らない」といい、そのあと「精神界も同じ事だ。」<sup>(二)</sup>といっている。さらに肉体と精神のつながりを示す描写として、津田は「局部に起る変な感じ」、局部の「収縮」<sup>(九十三)</sup>を、お延が病院にいる自分をおいて、芝居へいこうとした時、また、お秀が見舞にきた時、そして、彼女から経済的な問題で批判された時、実感している。この二つの例によって、この作品における肉体と精神のつながりは明白である。

そこで問題になるのが、温泉行きの前の津田と医者やりとりである。

彼と医者之間に起つた一場の問答が其辺の消息を明らかにした。

「是が癒り損なつたら何うなるんでせう」

「又切るんです。さうして前よりも軽く穴が残るんです」

「心細いですな」

「なに十中八九は癒るに極つてます」

「ちや本当の意味で全癒といふと、まだ中々時間が

掛るんですね」

「早くて三週間遅くて四週間です」

「此所をでるのは？」

「出るのは明後日位で差支ありません」

津田は有難かつた。さうして出たらすぐ温泉に行かうと覚悟した。なまじい医者に相談して軋地を禁じられでもすると、却つて神経を悩ます丈が損だと打算した彼はわざと黙つてゐた。それは殆んど平生の彼に似合はない粗忽な遣口であつた。(百五十三)

この二人の会話は、津田の療治のための温泉行きの失敗を意味する場面であらう。ここで医者は、完全に癒るとはいつていないのだし、また、医者に温泉行きをいわなかつたのが、「平生の彼に似合はない粗忽な遣口」であるからである。ということとは、やはり、療治は失敗するのであり、そのことは、この作品における肉体と精神の關係を考えれば、津田の清子との關係も、彼の思い通りにはいかなことを示していることになる。

津田にはなぜ清子が自分から逃げたか分からない。清子の方から津田への明確な形で理由の説明はないが、ある程度考えられないこともない。

お延と結婚する前の津田は一人の女を愛してゐた。

さうして其女を愛させるやうに仕向けたものは吉川夫人であつた。世話好きな夫人は、此若い二人を喰つ付けるやうな、又引き離すやうな閑手段を縦まゝに弄して、そのたびに迷兎々々したり、又は逆せ上つたりする二人を眼の前に見て楽しんだ。けれども津田は固く夫人の親切を信じて疑がはなかつた。(中略) 所がいざといふ間際になつて、夫人の自信は見事に鼻柱を挫かれた。津田の高慢も助かる筈はなかつた。夫人の自信と共に一棒に撲殺された。肝心の鳥はふいと逃げたぎり、遂に夫人の手に戻つて来なかつた。(百三十四)

この場面をみると、清子が逃げた理由に吉川夫人が関わっていることも明らかであるが、そのことはおいて、津田を中心と考えれば、彼の「高慢」が問題になっているといえよう。また津田は、吉川夫人に「貴方は学校へ行つたり学問をしたりした方の癖に、丸で自分が見えないんだからお氣の毒よ。だから畢竟清子さんに逃げられちまつたんです」(百四十一)といわれているが、彼女によると、津田が「自分が見えない」から逃げられたことになる。津田は温泉場での深夜の遭遇の翌日の清子の部屋で、彼女から「たゞ貴方はさういふ事をなさる方なのよ」といわれ、彼が

「待伏せをですか」

と問うと、彼女は

「えゝ」(百八十六)

と答えている。大岡昇平氏は、この場面にふれて「ここで清子はなぜ不意に津田を捨てたかの理由の一部をかなり津田にとつて屈辱的な形で明かしている。」<sup>(29)</sup>と述べられているが、確かにその通りである。この清子の言葉には、彼女が津田をどう思っていたのか、ある意味では、はっきりとできているといえよう。彼女は津田を待伏せをするような卑劣な人間と思つていたのである。以上まとめてみると、清子が逃げた理由は、津田の「高慢」「自分が見えないから」「待伏せをするような卑劣な人間」ということになる。この三つでは、不明確であるが、津田にとってこれ以上明確な形で、清子が逃げた理由を述べるとは思えない。それは、津田に対する清子の拒否の姿勢がはっきりしているからである。

清子の拒否の姿勢は、再会した時の清子の蒼白のイメージにも明らかであるが、再会後の津田の質問に清子が答える場面でも明らかである。それは次の如くである。

「それで僕の訊きたいのはですね——」

清子は顔を上げなかつた。津田はそれでも構はずに

後を続けた。

「昨夕そんなに驚ろいた貴女が、今朝は又何うしてそんなに平気でゐられるんでせう」

清子は俯向いた儘答へた。

「何故」

「僕には其心理作用が解らないから伺ふんです」

清子は矢つ張り津田を見ずに答へた。

「心理作用なんて六づかしいものは私にも解らないわ。たゞ昨夕はあゝで、今朝は斯うなの。それ丈よ」

(百八十七)

この場面に関して、大岡昇平氏は「ここは清子の天衣無縫の性格の例証としてよく引用されますが、今読み返すと清子が俯向いたままなのが気になります。清子はうそを吐いているかも知れないので、決して無邪気に自己を語ってはいません。」<sup>(30)</sup>と述べられているが、「俯向いた儘」以外にも、その前に「顔を上げなかつた」とあり、後に「津田を見ずに」ともあり、清子の津田への拒否の態度は明白である。昨夕の心理作用を問う津田に「昨夕はあゝで、今朝は斯うなの。」といい、ただ事実のみを主張する清子の答えも、象徴的色彩をおびているともいえよう。三好行雄氏の「これは清子へ試みるすべての問いがついに不毛である

ことを暗示する<sup>(31)</sup>」の如くであろう。

津田の、温泉場に何時迄いるかの問いに答えて、清子は、「予定なんか丸でないのよ、宅から電報が来れば、今日にでも帰らなくつちやならないわ」(百八十八)といっているが、これは、下女の、夫の関が「何でも近いうちにまた入らつしやるとかいふ事でしたが、何うになりましたか」(百八十)と、津田にいう言葉と矛盾しているともとれる言葉であり、清子の意識的な言葉であるといえよう。飛鳥井雅道氏の「清子がまさしく津田ではなく、彼女の夫のものであることを宣言したことではないのかと思う」<sup>(32)</sup>の指摘の如くであろう。このような清子の津田への拒否の姿勢をみれば、津田と清子の関係が今後どうなるかは明らかであるといえるかもしれない。

小林は自分の送別会の時、津田に次のようにいっている。

「よろしい、何方が勝つかまあ見てゐる。小林に啓発されるよりも、事実其物に戒飭される方が、遙かに観面で切実で可いだろう」(百六十七)

この小林の言葉に対して、津田は「相手の口から出た最後の言葉などを考へる余地がなかった」。(同)のである。この津田の受け取り方の表現は、明らかに、小林の予言の中を、津田の事実による戒飭があることを意味している

といえよう。そして、津田の温泉行きは、小林のいうように「無役の負戦」(百六十)であろう。また、小林のここのでいう「事実」が具体的に何を意味しているのか、荒正人氏の「どんなふうにも考えられる」<sup>(33)</sup>の指摘の如く、いまひとつ明確でない。小宮豊隆氏は

「事実其物」とは、言ふまでもなく吉川夫人から「療治」を受けたお延が、津田の爲めに、一生に一度の、肚の中に貯へてゐた勇気を、ありつたけ出して見せる、行為をさすのである。<sup>(34)</sup>と解釈し、内田道雄氏は、

それは小林のことばである限り、形而下的な(物質的な)或種の危機と考へねばならないだろう。<sup>(35)</sup>

と解釈されるが、私としては、この「事実」を清子の言葉との関連の中で考えたい。清子はすでにみた如く、津田に対して「たゞ昨夕はあゝで、今朝は斯うなの。」と、心理作用でなく、事実を主張しているし、また津田に答えて「疑つたのは事実ですもの。其事実を白状したのも事実ですもの。いくら謝まつたつて何うしたつて事実を取り消す訳には行かないんですもの」(百八十六)と事実のもつ重さを主張してもいるからである。清子の事実の主張によって結局津田は戒飭されることになる。「明暗」の未完の部分に

どのようなドラマがまちうけているかは分らないが、結局は、津田の温泉地到着の時点に思ったとおりに、「その夢を抱いてまた東京へ帰って行く。それが事件の結末にならないとも限らない。いや多分はさうなりさうだ。」となるであろう。津田は結局、暗い自己をいだいて日常的現実の世界に帰っていくしかないのである。またその日常的現実が、津田にとって違ってみえてくることも確かであろう。

「明暗」は、日常的現実の中に確たる位置をしめ、確たる自己をもっている俗物津田が主人公である。彼は決して今のお延との結婚生活に満足していない。そのような彼にとって、かつての恋人清子に会うための温泉行きは、お延との夫婦関係を中心とする日常的現実の克服を意味していた筈であったが、予想は裏切られ、そこで彼は日常の背後にある、また日常を超えたところにある非日常の世界に直面し、現実の不確かさ、自己の存在の不安定さ、はじめさを知り、自己喪失の危機にさらされる。そして結局は、かつての恋人清子にも拒否されることによって、今迄の俗物である自己がみえてくることになり、不安と苦悩にとらえられていくことが予想されるのである。それはまた、主人公津田が作家漱石に近づいていくことを意味するのかもしれない。

注

- (1) 続・夏目漱石論(下)——晩年の漱石——(『三田文学』46巻8号 三田文学会 昭和31年8月 二五頁)
- (2) 『明暗』の構造(講座夏目漱石 第三巻『漱石の作品(下)』有斐閣 昭56年11月 二八一頁)
- (3) 漱石における「現実」——『明暗』について——(『国土』8号 国土社 昭和23年4月 四三頁)
- (4) 夏目漱石論(中央公論) 43年6号 中央公論社 昭和3年6月 一一五頁)
- (5) シンボジウム日本文学14『夏目漱石』 学生社 昭和50年11月 二〇二頁)
- (6) 芸術一家言(『改造』2巻7号 改造社 大正9年7月 九九頁)
- (7) 則天去私をめぐって——『明暗』と則天去私の關係(近代文学鑑賞講座 第五巻『夏目漱石』 角川書店 昭和33年8月 二八四頁)
- (8) 明暗のかなた(『文学』38巻12号 岩波書店 昭和45年12月 五六頁)
- (9) 『明暗』解説(漱石文学全集 第九巻『明暗』 集英社 昭和47年12月 七七三頁)
- (10) 『明暗』の結末についての試案(『群像』41巻1号 講談社 昭和61年1月 三〇二頁)
- (11) 佐藤泰正著『夏目漱石論』 筑摩書房 昭和61年11月 三六一頁)

- (12) 注8に同じ。四九頁
- (13) 平岡敏夫著『漱石序説』 塙書房 昭和51年10月 三九四頁
- (14) 注2に同じ。二九八頁
- (15) 注8に同じ。五四頁
- (16) 「幽霊」については、既に津田が小林の手紙をみる場面  
で何度も使われている。手紙の中で「幽霊のやうな僕の心  
境」(百六十四)とあり、津田が手紙をみた感想として「今  
日迄まだ会つた事もない幽霊のやうなもの」(百六十五)、  
また「貧乏の幽霊」(同)とあり、ここでの「幽霊」の伏線  
となっていることは明らかであり、津田が自己を「幽霊」  
と思うことの意味は深いといえよう。
- (17) 小宮豊隆著『夏目漱石』 岩波書店 昭和13年7月  
八七三頁
- (18) 荒正人著『夏目漱石』 五月書房 昭和32年12月 一八三  
頁
- (19) 『明暗』の運び―続『明暗』論―(『明治大正文学研究』  
8号 東京堂 昭和27年10月 三七頁)
- (20) 岩上順一著『漱石入門』 中央公論社 昭和34年11月  
二二二頁
- (21) 私の見た漱石(『文芸』「夏目漱石読本」) 河出書房 昭和  
29年6月 三四頁
- (22) 注1に同じ。三一頁
- (23) 『明暗』(『日本近代文学』第5集 日本近代文学会 昭和  
41年11月 七五―七六頁)
- (24) 漱石文学における「実質の論理」(『明暗』を中心に―  
『国語と国文学』50巻3号 東京大学国語国文学会 昭和  
48年3月 六四頁)
- 清子を理想的女性とみることへの反論の根拠として、内  
田道雄氏(『明暗』前出)、相原和邦氏は、清子の夫関と津田  
が病院であつたこと、清子の流産のことをあげられている。
- (25) 「明暗」―その隠れたモチーフ―(『別冊国文学』No.5「夏  
目漱石必携」 学燈社 昭和55年2月 六九頁)
- (26) 注2に同じ。三〇一頁
- (27) 江藤淳氏は、この場面を根拠にして、津田が「宿痾を再  
発して死ぬ。」(『続・夏目漱石論(下)―晩年の漱石―』(前  
出(三二頁)とされるが、既に指摘もある如く、「百七十  
六」に「彼は忘れる事の出来ない印象の一つとして、それ  
を後々迄自分の心に伝へた。」や「後から其刹那の光景を  
辿るたびに、何時でも彼の記憶に顔を出したがる疑問で  
あつた。」という、津田の回想の場面があることから、宿痾  
の再発はあつても、彼の死は考えられないであらう。
- (28) ここで「肝心の鳥はふいと逃げたきり」という表現があ  
るが、この作品における「鳥」のイメージについてふれて  
おきたい。一応七つあげてみる。
- ①「津田は、突然籠の中にある小鳥の訴へを聞かされたや  
うな心持がした。」(四十四)
- ②「彼女は、丸で父母の監督によつて仕切られた家庭とい  
ふ籠の中で、さも愉快らしく囁く小鳥のやうなもので、一

且戸を開けて外へ出されると、却つて何う飛んで可いか、何う鳴いて可いか解らなくなる丈であつた。」(六十七)

③「彼はそれを更紗の風呂敷に包んで、恰も鳥籠でもぶら下げてゐるやうな具合にしてお延に示した」(七十九)

④「彼は籠の中の鳥見たやうに彼女を取扱ふのが氣の毒になつた。」(九十三)

⑤ この「百三十四」の場面である。

⑥「お延の詩、彼の所謂妄想は、段々活躍し始めた。今迄死んでゐると許り思つて、弄り廻してゐた鳥の翅が急に動き出すやうに見えた時、」(百五十四)

⑦「突如として彼女が関と結婚したのは、身を翻へす燕のやうに早かつたかも知れないが、」(百八三)

①と④と⑥がお延について、⑤と⑦が清子について、②が継子についてである。以上のように六つまでは、女性が鳥にたとえられている。男性の津田については、③にあるやうに、「鳥籠でもぶら下げてゐるやうな」とあるが、これは漱石の津田への皮肉であらうか。ともかくこの作品において、漱石が、男女の關係を鳥のイメージを使って表現していることは間違いないといえよう。

(29) 『明暗』の終え方についてのノート(「図書」413号 岩波書店 昭和59年1月 三頁)

(30) 注10に同じ。二九七頁

(31) 注2に同じ。三〇七頁

(32) 飛鳥井雅道著『近代文化と社会主義』 晶文社 昭和45

年10月 一七四頁

(33) 注9に同じ。七一頁

(34) 『明暗の構成(「文学」3巻3号 岩波書店 昭和10年3月 二八二頁)

(35) 注23に同じ。七五頁

(本学助教授)